

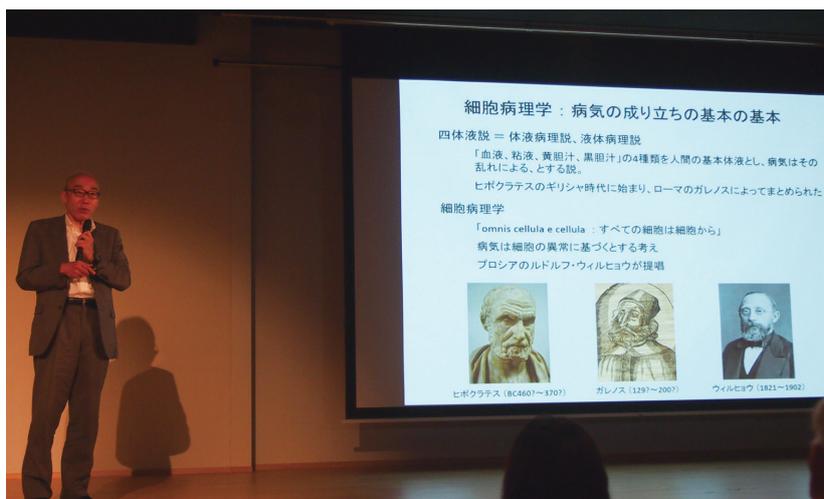
タンパク質動態研究所講演会シリーズ 「ようこそタンパク質の不思議な世界へ」



2019年度に、タンパク質動態研究所のアウトリーチ活動として、「ようこそタンパク質の不思議な世界へ」と題して、3回の一般市民向け講演会シリーズを行いました。サブタイトルには「理系の嫌いな人歓迎！」と銘打って、最新のサイエンスのおもしろさ、研究者にとってのサイエンスの楽しみ方などをわかりやすく一般の人に伝えることをめざし

ました。

毎回各分野のトップの研究者1名をゲストスピーカーとして、外からお招きし、研究所のメンバーとゲストスピーカーの先生が講演を行い、その後、永田所長を含めて3名が登壇し、ゲストスピーカーの先生にインタビューするという形で行いました。第1回は2019年9月14日に大阪大学大学院医学系研究科の仲野徹先生をお招きし、「(あまり)病気をしない暮らし」というタイトルでご講演いただきました。研究所からは永田和宏所長が「細胞って、こんなにおもしろい」というタイトルで細胞から見た生命科学を話されました。仲野先生は書籍やインターネットなど様々な形で発信をつづけられているだけあって、先生ならではのユーモア満点、軽妙な語り口で、がんの発生機構という固い内容を分かりやすく説明いただきました。タイトルが「病気をしない暮らし」ではなく、「(あまり)病気をしない暮らし」となっているあたりは、お見事でした。



仲野先生のご講演、まずはイントロから

第2回は2019年12月7日に理化学研究所生命機能科学研究センターの竹市雅俊先生をお招きし、「生命は謎だらけ：好奇心こそ科学のはじまり」というタイトルでご講演いただきました。

研究所からは近藤寿人教授が「発生って、こんなにおもしろい」というタイトルで発生の研究の魅力を話されました。竹市先生は細胞どうしを結びつけるタンパク質カドヘリンの発見者ですが、講演ではご自身の研究だけでなく、生物の本能に関わる複雑な行動（オトシブミの巣の作り方など）を例に、正しく謎だらけの生命科学の本質をわかりやすく話されました。た



第2部の鼎談/インタビュー，左から近藤，竹市，永田の各先生

しかに小鳥のさえずりのプログラムなどについては少しずつ解明されてきていますが、葉に切れ目を入れて折りたたんで、トポロジー的にも複雑な巣をつくりあげる方法がDNAのどこに書き込まれているのか、まったく不思議です。カメラがご趣味とのことで、生き物のきれいな写真も印象的でした。

第3回は2020年2月22日に大阪大学大学院生命機能研究科・医学系研究科の吉森保先生をお招きし、「細胞が自分を食べる：オートファジーの不思議」というタイトルでご講演いただきました。研究所からは遠藤斗志也が「ミトコンドリアって、こんなにおもしろい」というタイトルで自身とオルガネラ研究の関わりのことを話しました。吉森先生はノーベル賞受賞者の大隅良典先生のラボで一緒にオートファジーを研究されていたこともあり、酵母で見つかったオートファジーがわれわれヒトでも、発生から病気や老化まで、さまざまな局面で重要な役割を果たしていることを分かりやすく話していただきました。吉森先生は多趣味でいろいろなことにウンチクの深い方なのですが、時間が足りずにそうしたことまでは話を広げられなかったのはちょっと心残りでした。



控え室で，左から近藤，吉森，永田，遠藤の各先生

講演会場は京都産業大学附属中学高校のある下京区のむすびわざ館で行われました。交通の便ということでは少し不便なところですが、また中学校や高校の行事と重なる日程もあったに

もかかわらず、高校生からご高齢の方まで多くの方に来ていただき、なかにはまた毎回来ていただいた方も少なからずいらっしゃったことは心強く感じました。アンケートの回答の中では、「サイエンスにあまりつながりのない人でも非常に楽しめた内容」「漠然と感じたり、思ったりしていたことが興味深い表現で語っていただけた」「失礼ながら今まで貴大学の研究活動について全く関心を持っていなかった。しかし本日の講演会に参加しこの認識が誤りであることを知った」「このシリーズが3回で終わるのは残念です」などの声は、心強く感じました。一方で「レジュメが欲しかった」「もっとタンパク質に話が聞きたかった」「講演内容の密度に比べ、時間が短い」「研究活動の広報が不十分ではないか」などの厳しい注文もありました。今後の参考にしていきたいと思えます。

本研究所のファン(?)ができてつあるところで3回の講演シリーズは終了しました。現在はコロナ禍のため第二弾を行えない状況ですが、ウィズコロナの時代のなかでの発信を考えたいと思っています。

(文責：遠藤斗志也)